

2月4日 年間第5主日

イザ 6:1～8 Iコリ 15:1～11 ルカ 5:1～11

1.

私たちのミサが入祭の歌で始めると、司祭は“主は皆さんとともに”と呼びかけ、会衆も“また司祭とともに”とこれに応えます。これは父と子と聖霊のみ名によって呼び集められた一同の中心に、復活のキリストが共にいてくださることを覚えるためです。

そして司祭の招きに従って会衆一同が自らの罪を告白する“回心の祈り”を唱えてから、最初に歌うミサ曲はキリエ(あわれみの賛歌)です。そしてこの歌に直ちにグロリア(栄光の賛歌)が続いて、そしてその日の集会祈願が唱えられると、“ことばの典礼”に入っていきます。

このようなミサの形は、キリスト教のかなり初期の頃からのもののようです。今朝の三つの朗読聖書として選ばれている箇所は、いずれもちょうどミサのこの形に呼応していて、それが共通点になっています。それで先ずその点に注目してみましょう。

2. ルカ

弟子たちがイエスを「先生」と呼ぶのはルカ福音書の用語法なのですが、この物語りでは v.5 でイエスを「先生」と呼んだペトロが、v.8 で「主よ(キリエ)」と呼び方を変えています。

v.8 「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです。」

神の子イエス・キリストの前に出るといことは、罪の告白と“主よ、憐れんでください”という祈りが直ちにそれに続くものであることを、ルカ福音書の読者である初代教会の会衆たちはよく知っていました。私たちの主日のミサの中心に来てくださる方は“先生イエス”ではなくて“復活のキリスト”であります。私たちは罪の赦しを与えてくださるイエス・キリストを通して父なる神の御前にミサをささげます。

このルカ福音書の物語りは、イエスが漁師たちを御自分の弟子とされた話なのですが、「わたしは罪深い者なのです」と言ってイエスの足もとにひれ伏したペトロに焦点が当てられています。彼の罪の告白が神の前での深い恐れとして描かれています。そしてそのことによって、彼が後に「人間をとる漁師」として、全世界にキリストの福音を宣教する人々の先頭に立つ者として最初から召された人であったことを、暗示しているのです。

3.

自らの罪の深さをだれよりもよく知ることによって使徒となったパウロは、「わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました。しかし、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです」(Iコリ 15:10) と言いました。

BC.8世紀預言者のイザヤは、神の前での滅びるばかりの罪と汚れの恐れの中から、罪の赦しと同時に預言者としての召しを受けました。(イザ6:8)

このような聖書の物語りの朗読を聞いて、私たちは今朝このミサをささげているのです。それらは旧約の大預言者、新約の大使徒たちの物語りであって、神の力は人間の最も深い罪の中で働くことを教えてくれます。

それでは今朝共にミサをささげている私たち自身の“回心の祈り”と“あわれみの賛歌”はどうでしょうか。次にそのことに目を向けてみましょう。

4.

私たちは毎主日のミサで必ず“回心の祈り”を一同で唱えるのですから、聖書と教会が教えている“罪”について出来るだけ正しい理解を持ちたいと思います。その場合に何よりも先ずははっきりしておかなければならないことは、“罪”とは“神に対するもの”、“神に背き”、“神を呪う(否定する)”(ヨブ1:5 参照)ことだということです。

神を知らない世俗の人々は、犯罪や法律違反のことを“罪”と呼びます。また反社会的行動や不平等、弱者の抑圧等々という“罪”を考えます。しかし私たちキリスト者は、十字架のキリストが私たちに代わって負ってくださった神の御前での私たちの“罪”を考えます。

私たちのミサが、“回心の祈り”を唱え、“あわれみの賛歌”を歌うことで始まる形になっているのは、“罪の赦し”は神から、ただ神からのみ来ることを、古くから教会が知っていたからでした。神がイエス・キリストの十字架の贖いによって赦してくださった“罪”……、それが私たちが“回心の祈り”で告白する“罪”であります。

ペトロが神の子であるイエス・キリストのみ前で、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と叫んだその恐れに私たちが共感することは、正しい罪の告白への道なのだということを知りましょう。イエスの言葉「恐れることはない」(ルカ5:10)は、聖書における神顕現に伴う定形句で(イザ41:10、ルカ2:10他)、罪を告白する私たちもペトロと共に、このキリストの語りかけを聞かせていただくのです。私たちのミサの“あわれみの賛歌”は、信仰と感謝と献身の歌なのです。

アーメン、ハレルヤ。

2月11日 年間第6主日

エレ 17:5～8 コリ 15:12～20 ルカ 6:17,20～26

1.

今朝の福音の朗読を通して、天のイエス・キリストは私たち新しいイスラエルである主の民に語りかけておられます。私たちは共にミサをささげる救われた会衆として、福音の朗読を聞きました。私たちはもし聖書を正しく理解し、聖書から正しく神のことばを聞こうと願うなら、このようなミサという場面の外に出てはなりません。

聖書は印刷し出版された書籍としていつでも書店で買うことの出来るものですが、その聖書はどのような人がどのような背景で、またどのような目的で読むかによって、神のことばともなり、そうでなくなることもある……ということを、私たちは厳粛に受けとめなければならないと思います。

2. ルカ

v.20 「貧しい人々は、幸いである。」

ルカがこの「貧しい人」を イザ 61:1 との結びつきで理解していることは、すでにナザレの会堂でのイエスの宣教の物語り(ルカ 4:16-21)から明らかです。これは“へりくだった敬虔なイスラエル”を意味していました。それは エレ 17:7 の「主に信頼する人」のことであり、「主がその人のよりどころとなられる」のです。イエス・キリストへの信仰と復活の希望から切り離して v.20 の「貧しい人々」を考える過ちを、私たちは避けるよう心掛けたいものです。

イエスは社会の中で貧しく、搾取され、圧迫されている人々の側に立つ解放者である…… というような理解は、聖書が本来語ろうとしている福音とは何の関係もないものです。

次に、「今飢えている人々」(v.21) で、ルカは 詩 107:9 を会衆に連想させようとしたに違いありません。そのようなルカの意図は、マリアの賛歌の中の ルカ 1:53 を並べて見ると明らかだと思います。神の救いに対する飢え渴きを満たしてくださる方として、復活のイエス・キリストが今朝このミサに来て語りかけてくださっています。

すでに最初の教会は歩み始めて間もなく、当時のユダヤ人たちから敵視されるようになり、「人の子のために(会堂から)追い出され」(v.22) ることになりました。教会はこのユダヤ人たちによる迫害を、終末の日の到来のしるしとして理解しました。v.23 の「喜び踊りなさい」は「その日には」と共に、マラ 3:20-21 からの引用です。

社会的な不公平、少数の富める階層による貧しい民衆への抑圧と搾取、というような視点に立って聖書を読み、福音書のイエスを理解しようとするのは、決して聖書の正しい読み方ではないのです。

v.23 「この人々の先祖も、預言者たちに同じことをしたのである。」

v.26 「この人々の先祖も、偽預言者たちに同じことをしたのである。」

それは神への敬虔も、神の救いへの飢え渇きもない人々のことを指して言っているのであって、そのような“キリストの救いを必要と考えない人々”のことを、「富んでいる」「満腹している」「今笑っている」(w.24-25)と表現しているのです。

3.1 コリ

“教会の希望であるキリスト”は、「死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられ」たキリストです。(v.20) あなたがたが使徒たちの教えを通して受け継いだ“復活の希望”は空しいものではないと、使徒パウロはコリント教会の人々に書き送りました。確かに教会はこの“復活の希望”への信仰の有無によって立ちもし、倒れもするのです。

ここにミサをささげるために集まって来ている私たち現代のキリスト者に向かって、天上のイエス・キリストは今朝の福音朗読を通して、もう一度新たに語ってくださっています。

「貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである。

今飢えている人々は、幸いである。あなたがたは満たされる。

今泣いている人々は、幸いである。あなたがたは笑うようになる。」(ルカ w.20-21)

アーメン、ハレルヤ。

2月18日 年間第7主日

サム上 26:1～25 Iコリ 15:45～49 ルカ 6:27～38

1. ルカ

イエスの語られた数々の語録が共観福音書の材料として用いられたとき、それぞれの福音書を生み出した当時の教会共同体の性格がそこに反映したであろうことを、私たちは考えます。ルカも彼が関係していた諸教会での当時の信徒訓練に、それらのイエスの語録が用いられていたという背景に立って、彼の福音書を書いたのです。

そのような訳で私たちは今朝の福音書のテキストを、「神の国はあなたがたのものである」(6:20) と呼ばれるようになった会衆である教会共同体の中での、勧めの言葉として理解します。それは教会の外の世界の人々を対象とした教訓ではなく、まして人類すべてを対象とした最高の道徳などというものでもありません。

教会は御子イエス・キリストの血によって贖われた者たちの共同体であって、一人一人は聖霊の証印を押されたのです。(エフェ 1:13-14、IIコリ 1:21-22 参照) そのような共同体への勧めの言葉として、使徒およびその後継者たちによってイエスの語録が用いられて行ったということを、現代のキリスト者はよく理解する必要があります。

2. サム上

この26章の物語りは、神に祝福された人ダビデの人間的な魅力を多に高めた美談の一つであったと思われる。しかし旧約聖書においてこの美談は、イスラエルの神ヤーウェへの恐れを学ばせる教材としての役割を伴って、語り伝えられて来ました。

v.23 「主は、おのおのに、その正しい行いと忠実さに従って報いてくださいます。今日、主はわたしの手にあなたを渡されましたが、主が油を注がれた方に手をかけることをわたしは望みませんでした。」

サウルの敵意を避けて苦しい逃亡の旅を続けて来たダビデが、それでも「主が油を注がれた方に、わたしが手をかけることを主は決してお許しにならない」(v.11) と言って、報復のチャンスを自ら捨てた物語りに、私たちは“イスラエルの信仰”を学ぶのです。

この神の民であるイスラエルの信仰は、新しい神の民であるキリスト教会に受け継がれました。そのことを私たちが理解するとき、今朝のルカ福音書のテキストをより適切な視点で解釈することが出来ます。なぜなら教会は、御子イエス・キリストによって聖霊の証印を押された者たちの共同体だからです。

3. ルカ

ルカ福音書の今朝の朗読箇所には、殆どどの一つも実際の私たちには実行不可能であるようなイエス

の言葉が集められています。初代教会の会衆たちにとっても、事情は同じだったことでしょう。もしこれらの勧めに完全に従うことが、神の国を受け継ぐことの出来るための条件だったとしたら、これらのイエスの語録は教会にとって“福音”ではなかったはずで

す。これらの聖書の言葉を忠実に実行することが、キリスト者の正しい生き方なのだと解釈した多くの人々が、実際には単なる偽善者になっただけだったというのが、歴史の悲しい事実です。

しかしルカにとっても、他の共観福音書にとっても、このイエスの語録は“福音”でありました。その中のどの一つも実行できない私たちの罪を、主イエス・キリストは私たちに代わって負って十字架に死んでくださり、御自身の義を私たちに与えてくださいました(ロマ3:23-24, 4:25)。私たちの罪が無くなったのではなくて、御子の血によって贖われ、罪を赦されたのです(エフェ1:7)。

4. コリ

v.49 「わたしたちは、土からできたその人(アダム)の似姿となっているように、天に属するその人(キリスト)の似姿にもなるのです。」

これが教会共同体に属する救われた会衆の本当の姿なのです。しかしそれはイエス・キリストへの信仰によってだけ理解出来ることであって、教会の外の人々には全く理解出来ません。

外見上は教会の会衆も、外の世界の人々の各種の集まりと殆ど同じで、人間関係の難しさ、争い、欲、不和などから逃れることが出来ません。しかしそのような現実にもかかわらず、共にミサをささげる群は贖われた神の国の民なのです。

イエスの語録は初代教会にとってそうであったように現代の私たちにとっても、イエス・キリストの罪の赦しの中で慰めの言葉として朗読され、聞かれて行きます。

アーメン、ハレルヤ。

2月25日 年間第8主日

シラ 27:4~7 Iコリ 15:54~58 ルカ 6:39~45

1. ルカ

ミサは、イエス・キリストに救われた会衆が集まって、共にささげる神奉仕であると言われて来ました。“神奉仕(Gottesdienst)”という用語は二重の意味を持っています。言うまでもなくその第一は、父なる神がその独り子イエス・キリストの十字架の救いによって私たちに奉仕してくださったことであって、その御業について聞き、十字架の奉献を記念することがミサの最も大切な内容であります。この“神の奉仕”と固く結びついているのが、私たち会衆の“神への奉仕”です。すべてのキリスト者は教会の頭であるキリストの祭司の務めに与かって、その奉献の一つに結ばれて、神への奉仕をささげます。

このような祭司の民、奉仕者の群である全世界の教会が、今朝の福音書である ルカ vv.39-45 の朗読を聞いています。神奉仕において、私たちがそれぞれ自らを省みてよい奉仕者になろうと心掛けることを、今朝の朗読聖書は勧めているのです。

マタイ福音書においてはユダヤ人の指導者やファリサイ派の人々への批判に用いられていたイエスの語録の一部が、このルカ福音書のテキストでは教会の神奉仕に参加する会衆への自己点検を促す呼びかけとなっているのは、それぞれの福音書の成立の背景の違いから来ていることでもありますから、私たちはその違いを尊重して聖書に取り組む必要があります。

2.

私たちのささげるミサが、よいものに育って行くことを教会のだれもが願っています。そのために熱心に奉仕したり、指導したり、意見を交換したりします。そのときに大切なことは、そのような奉仕者自身が「良い木」「善い人」になろうと努力すること、盲人ではなくて見えるようになることです。そこで、共にミサをささげる群にふさわしい「良い木」「善い人」のことを考えましょう。

聖書の中の多くの教えが、教会やミサやキリスト教信仰から独立して、“美しい立派な道徳や教訓”として独り歩きして来たことを、私たちはよく知っています。それは多くのキリスト教信者にとって、自らの優越感を支えるものでさえありました。

しかし主日のミサに集う私たちに聖書が本来語ろうとしていること……、父なる神が聖書を通して今朝この私たちに語っておられること……を聞こうとすることこそが、教会にとっては必要なのです。

今朝のシラ書の非常に分かりやすい教訓が、主を畏れその御前にへりくだるイスラエルに向かって語られたものであって、そのような主の会衆と切り離して読まれてはならないように、私たちはルカ福音書が語る「良い木」「善い人」を私たちのミサから切り離して考えるはなりません。

3. Iコリ

私たちは今朝まで四回の主日にわたって、1コリ15章 からキリストの復活の事実と私たち自身の復活の希望について学んで来ました。「この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着る ……」 からだの復活を待ち望みつつ、死に勝利された主イエス・キリストへの信仰によって ささげる私たちのミサへの力強い励ましを、今朝一緒に聞いています。

w.57-58 「わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば ……」

ここで私たちは、「良い木」「善い人」がイエス・キリストへの信仰と復活の希望によって神奉仕に参加する人々のことであることを、はっきりと確信することが出来ます。そのような人々への慰めの言葉を聞きましょう。

v.58 「主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです。」 アーメン、ハレルヤ。